

伊豆半島沖地震における自然と人工による変化 : 地学散歩(9)

著者	木宮 一邦
雑誌名	静岡地学
巻	29
ページ	ii
発行年	1975-06-01
出版者	静岡県地学会
URL	http://doi.org/10.14945/00008398

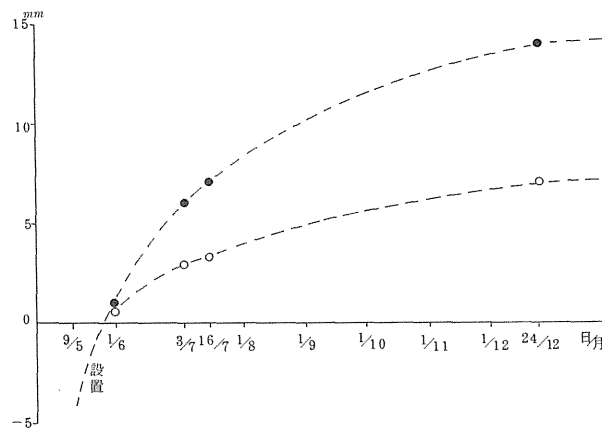
伊豆半島沖地震における自然と人工による変化

—— 地 学 散 歩(9) ——

木 宮 一 邦*

伊豆半島沖地震が起こってから1年間が過ぎた。この間数々の災害復旧工事が行われ、早くも地震の面影のなくなった所もあるが、依然としてその影響を大きく受けている所もある。このような地区では今後も様々な災害復旧工事が行われ、地震後の人工による変化が見られるであろう。写真1、2、3に示したのは、中木地区に起こった地すべり性崩壊地の崩壊前、崩壊直後および現在の写真である。写真1、2間の変化は、地震という自然現象が起こした変化であり御承知のような大被害をもたらした。写真2、3間の変化は人間が製造した機械でもって、最新の科学の英知を集めて行った今後の被害を防ぐための防災工事の結果表われた変化である。言わばこの1年間の人工による変化である。この3枚の写真を比べて見ると、人類発生以来の人間と自然との闘いは、近代的な技術が大いに発展し、人間側がかなり自然に対する力を貯わえてきたように見えるが、それは自然に対抗する力などというのではなく、自然の猛威から自分達を守る力に過ぎないことがよくわかる。

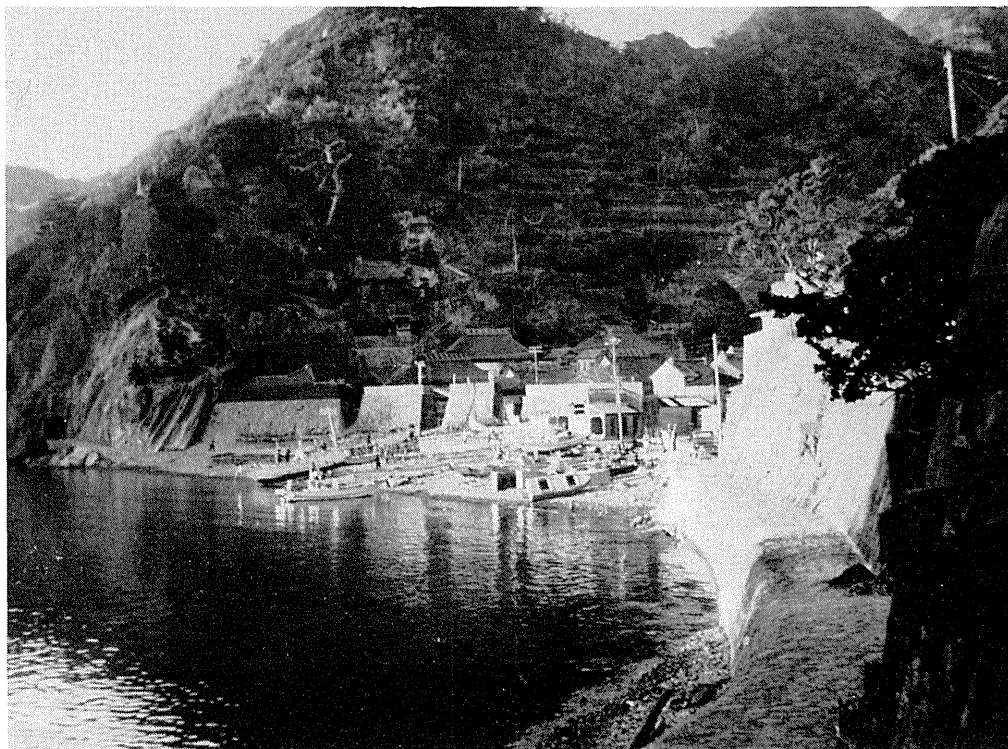
一方、伊豆半島沖地震で、瞬間的に水平方向へ約 34 cm、垂直方向へ約 17 cm動いた石廊崎活断層はその後どのような変化をしたのであろうか。写真4、5は、静岡大学が長津呂地区稲葉氏宅裏の活断層露頭に地震直後に設置したガラス板である。地震後半月後にガラス板を設置したので、その間の動きはわからない。設置後約1週間でガラス板に割れ目が入り(写真-4)、6ヶ月を過ぎた時(写真-5)には、垂直方向のガラス板はすでに割れて落ち、水平方向のガラス板も片側は割れて、はっきりとその後の断層の動きを示している。これによると、地震後1年間の動きは地震時に動いた方向と同じ方向へ少しずつ動いていることがわかる。その動きは下図に示すように序々に減ってはいるが、ガラス板を設置後6ヶ月間の総量は、水平方向へ14 mm、垂直方向へ7 mmに達している。この動きは、地震後も続く自然の偉大な変化である。



石廊崎稲葉氏宅裏で測定された地震断層

5月23日測定開始、黒丸は水平移動量、白丸は垂直移動量を示す。
変移量は5月23日を0とした。

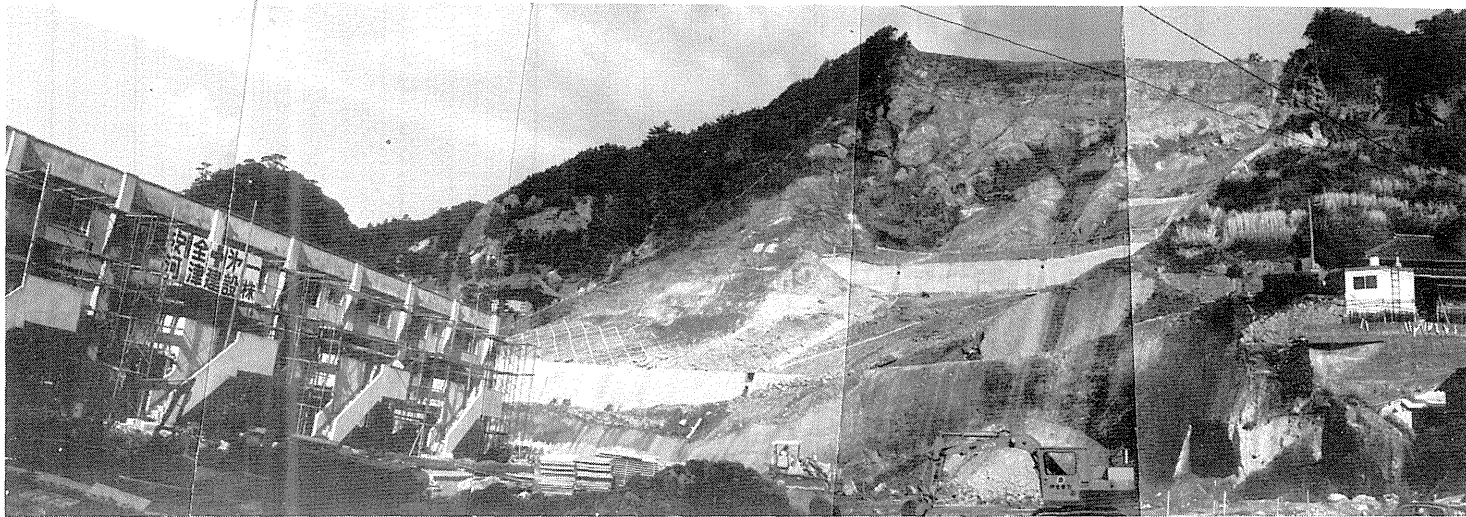
(静岡大学・教育学部)



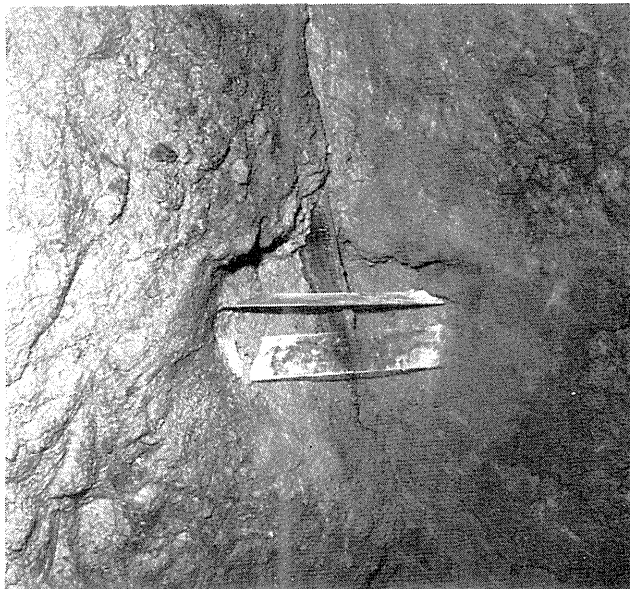
1. 崩壊前の中木地区
昭和42年撮影
(提供 読売新聞)



2. 崩壊直後の中木地区
昭和49年5月11日撮影
(徳山明氏 撮影)



3. 崩壊1年後の
中木崩壊地
昭和50年5月9日撮影
(徳山明氏 撮影)



4. 石廊崎活
断層に取付
けたガラス
板
(稲葉氏宅)
昭和49年
6月1日
撮影
(岩橋徹氏
撮影)



5. ガラス板が示すその
後の変動量
水平方向 14 mm
垂直方向 7 mm
昭和49年12月24日
撮影